

エラリー・クイーン

完全ガイド

飯城勇三

ELLERY QUEEN PERFECT GUIDE

広く、深く、わかりやすい。これから俺たちの人生は
EQ を読む人も、読み返す人も、この作家に狂わされた。
この本が座右にあれば楽しさ倍増。お前も道連れだ！

有栖川有栖 青崎有吾

日本のWクイーンが大推薦！“本格ミステリの神”の御業を総解説！

エラリー・クイーン完全ガイド

飯城勇三

星海社

204



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

本格ミステリの世界には「神」がいる。「エラリー・クイーン」という名の神が。

エラリー・クイーンは、一九二九年から一九七一年にかけて活躍した本格ミステリ作家です。作品の大部分を占め、作家と同じ名前の探偵が活躍する「エラリー・クイーン・シリーズ」は、本格ミステリとして高い評価を獲得。わずかに四作ですが、引退した俳優ドリー・レーンが探偵役をつとめる「悲劇四部作」も、高い評価を得ています。

しかし、卓越した作品を書いただけでは「神」とは呼ばれません。クイーンは、本格ミステリを変えてしまったのです。クイーン以前と以後では、探偵の役割が、叙述の形式が、挑戦状の意義が、推理のレベルが、フェアプレイの定義が、大きく変わってしまいました。それだけではありません。本格ミステリにおいて、クイーンはその土台を揺るがす作品を書き、その限界に挑む作品も書いているのです。さらに、本格ミステリを社会や戦争や精神分析や神学と結びつける試みにも挑みました。自ら世界を創り、揺さぶり、広げ、他

の世界と結びつける——だからクイーンは“神”なのです。

このクイーンから絶大な影響を受けた新本格世代によって、日本の本格ミステリは世界一の発展を遂げました。そして今、クイーン作品が新しい訳でよみがえり、埋もれた作品が紹介され、多くの作家や評論家がクイーンについて語っています。クイーンは令和になっても読まれるべき作家であり、本書はそのためのガイドブックとして書かれました。

ですが、本文に進む前に、この質問に答えてください。今、この本を手にとっているあなたは、クイーンを何作も読んでいるファンでしょうか？ それとも、数作程度、ひよっとしたら一作も読んでいない初心者でしょうか？

初心者のあなたに——クイーンからは逃げられない

前述のように、世界にはクイーンがあふれています。従って、あなたがクイーンに興味があなくても、「エラーリー・クイーン」を避けて通ることはできません。何人、いや、何十人もミステリ作家がクイーン好きを公言し、クイーン作品をもじった題名を自作につけ、クイーン作品の設定やテーマに挑んでいるのですから。ミステリ作家だけではありません。ステイヴン・キングを読んでも、村上春樹むらかみはるきを読んでも、谷川流たにがわなぐるの『涼宮ハルヒの直観』

を読んでも、青山剛昌の漫画『名探偵コナン』を読んでも、クイーンの名が出てきます。なぜかアニメ版『憂国のモリアーティ』にまで出てきます。理由は簡単で、クイーンは、読者だけでなく作家にも愛されている作家だからです。作家たちは、「クイーンの名を出せば読者にウケる」と考えたわけではありません。自分がクイーンの名を出したいから出すのです。従って、みなさんがクイーンの名に出会わずにいることはできません。

しかし、みなさんが、「だったら、ひとつクイーンを読んでみようか」と考えた場合、大きな壁に突き当たることになります。それは、「何から読めばいいかわからない」という問題（これを「初読クイーンの問題」と名付けましょう）。クイーンの場合、作風の変化が激しいため、みなさんが楽しいめない作風に出会ってしまう可能性は、決して小さくありません。例えば、しかくのの漫画「心的外傷の書」では、明日香様がクイーン中期の『緋文字』を読んで、終盤になっても挑戦状どころか死人も出て来ないのであせりまくる場面が出てきます。しかし、中期のクイーン長篇では、なかなか殺人が起きないのがデフォルト。作中では最後まで殺人が起きない長篇すらあります。一方、初期の長篇では、壁収納ベッドから死体が転がり出たりするような派手な冒頭がデフォルトなのです。

また、有栖川有栖ありす がわありすも法月綸太郎のりづきりんたろうも、共にクイーンの影響を公言していますが、この二作

家の作風は、かなりかけ離れていると思いませんか？ これは、影響を受けたクイーン作品が異なるからです。ということは、有栖川ファンと法月ファンでは、楽しめるクイーン作品が異なるわけですね。

本書のガイドでは、こういった作風の違いや、それぞれの作風を受け継いだ作家や作品などを紹介しています。みなさんは、ガイドの文を読んで、自分の好みに合った作風の作品を選んでください。そうすれば、クイーンを楽しむことができるに違いありません。そして、楽しむことができたならば、次は、自分の好みではない作風の作品に挑んでみてください。こちらでは、新たな楽しみに目覚めるかも知れませんよ。

エラーリー・クイーンとは、そういう楽しみ方ができる作家なのです。

ファンのあなたに——「パーフェクト」と「完全」の違い

あなたがクイーン・ファンならば、私が二〇〇四年に出した『エラーリー・クイーン Perfect Guide』（翌年刊行の文庫版は『エラーリー・クイーン パーフェクトガイド』）をご存じかも知れませんか。この本は本書と同じくクイーンのガイドブックですが、流用したのは年表の二〇〇五年までです。しかも、その二〇〇五年までも、項目を追加しました。あらずじ

紹介の一部やいくつかのネタには重複がありますが、全面的に書き直しています。

ただし、『完全ガイド』は『パーフェクトガイド』の新書版ではありません。新たなコンセプトを決め、それに従って新たに書き下ろしたものです。具体的には、

①対象を〈探偵エラリー・クイーンもの〉と〈ドルリー・レーンもの〉に絞り、それ以外の作品や編集者としての活動は簡単に触れる程度にする。——これは、『パーフェクトガイド』が作家のガイドだったため、対象を広げすぎて、作品自体や探偵キャラの掘り下げが不十分だった反省を生かしたものです。

②クイーンが日本の本格ミステリに与えた影響に言及。——私はこのテーマで『エラリー・クイーンの騎士たち』という評論書を出すくらい関心を持っていますが、『パーフェクトガイド』では、現役作家二十人へのアンケートを実施したので、この点には触れませんでした。今回は、そのあたりをたっぷり書かせてもらっています。

そしてもちろん、本書には二〇〇五年以降の新情報を盛り込むことも忘れていません。『パーフェクトガイド』を読んでいる人も楽しめる本を目指したので、ぜひご一読を！

はじめに
003

第1部

作家とその探偵
013

作家エラリー・クイーン
014

探偵エラリー・クイーンとその仲間たち
019

探偵ドルリー・レーンとその仲間たち
027

第2部

全作品ガイド
031

第1章 華麗なる推理の天才の活躍 033

ローマ帽子の秘密

034

フランス白粉の秘密

038

オランダ靴の秘密

042

ギリシャ棺の秘密

046

エジプト十字架の秘密

050

アメリカ銃の秘密

054

シヤム双子の秘密

058

チャイナ蜜柑の秘密

062

スペイン岬の秘密

066

エラリー・クイーンの冒険

070

コラム1 クイーンが変えた本格ミステリ

074

第2章 名探偵からヒーローに 079

中途の家

080

ニッポン檜鳥の謎

084

悪魔の報復

088

ハートの4

092

ドラゴンの歯

096

エラリー・クイーンの新冒険

100

コラム2 クイーンはアメリカでどう読まれたか？

104

第3章

名探偵の苦悩と挫折、そして再起

109

災厄の町 110

靴に棲む老婆 114

フオックス家の殺人 118

十日間の不思議 122

九尾の猫 126

コラム3 クイーンは日本でどう読まれたか？ 130

第4章

社会に挑む名探偵

135

ダブル・ダブル 136

悪の起源 140

帝王死す 144

犯罪カレンダー 148

緋文字 152

クイーン検察局 156

クイーン警視自身の事件 160

最後の一撃 164

コラム4 (後期クイーンの問題) とその波紋 168

第5章

ミステリの限界への挑戦

173

第6章

もう一人の名探偵ドルリー・レーン

225

盤面の敵 174

第八の日 178

三角形の第四辺 182

クイーンのフルハウス 186

恐怖の研究 190

顔 194

真鍮の家 198

クイーン犯罪実験室 202

最後の女 206

心地よく秘密めいた場所 210

間違いの悲劇 214

コラム5 名探偵のイメージと時代 寄稿Ⅱ 中村有希＋越前敏弥 218

Xの悲劇 226
Yの悲劇 230

Zの悲劇 234
レーン最後の事件 238

コラム6 クイーンの世界は終わらない 242

おわりに 247
エラリー・クイーン年表 250
最新邦訳一覧 261

第 1 部

作家と
その探偵

*AUTHORS
AND
DETECTIVES*

作家 エラリー・クイーン

探偵 エラリー・クイーンとその仲間たち

探偵 ドルリー・レーンとその仲間たち

作家エラリー・クイーン

一九〇五年、二人の天才がこの世に生を受けました。一月に生まれたマンフレッド・B・リーと、十月に生まれたフレデリック・ダネイは、「エラリー・クイーン」という名で合作し、その活動は世界の本格ミステリを変えることになったのです。

デビューまでの道のり——リアル『バクマン。』

リーとダネイは従兄弟同士（母親が姉妹）であり、わずか五区画しか離れていない家でそれぞれ生まれました。少年時代はお互いに強い友情と強いライバル心を抱き、その様子はダネイの自伝的小説『ゴールデン・サマー』に描かれています。学生時代は、通学時に大好きなミステリについて語り合い、その中にはトリックの案出も含まれていました。何と、「博物館での密室殺人。犯人は展示してある鎧の中に隠れた」というトリックもあつたそうです。

その後、リーは映画会社、ダネイは広告代理店に就職しましたが、職場も近くであり、

しばしば昼食を共にしました。そんなある日、二人は出版社ストークスと雑誌社マクルーアが共催する、賞金七千五百ドルの長篇ミステリ・コンテストに応募することを決めました。こうして名探偵エラリー・クイーンが活躍する『ローマ帽子の秘密』が書かれ、合作ペンネーム「エラリー・クイーン」が生まれたのです。この作品は、見事に賞を獲得——したので、マクルーア社が倒産し、コンテストを引き継いだ雑誌社は別の作家に賞を与えることにしました。落選になってしまったクイーンですが、『ローマ帽子』を評価するストークス社はこの作品を（もちろん賞金なしで）出版し、「エラリー・クイーン」がデビューすることになりました。つまりクイーンは、中井英夫や綾辻行人や法月綸太郎のようなかひ ひでお あやつしゆきと のりづきりんた ろうな、「〇〇賞落選作が出版されてデビューした作家」の先輩だったわけです。

デビュー後の活躍——七つの顔の作家

デビュー後のクイーンは順風満帆でした。フェアプレイを宣言し、読者に挑戦する本格ミステリ〈国名シリーズ〉は次々にベストセラーになり——「ミステリ部門」ではなく、「小説部門」のベストセラーです——作家専業に踏み切りました。そして、第二のペンネーム「バーナビー・ロス」を用いて、〈悲劇四部作〉を発表。この中では特に、『Xの悲劇』

『Yの悲劇』が本格ミステリの大傑作と評価されています。また、リーがクイーンを、ダネイがロスを名乗つての公開討論なども行い、現実の世界に「二人二役」トリックを持ち込んだりもしました。

活動はさらに広がり、高級雑誌での掲載、ハリウッドでの映画脚本執筆、ラジオドラマ・シリーズ『エラリー・クイーンの冒険』での脚本執筆、アンソロジーの編纂、さらには、自らが編集する雑誌《エラリー・クイーンズ・ミステリマガジン(EQMM)》の創刊まで手がけているのです。まさに驚異的な活躍と言えるでしょう。しかも、ラジオドラマは一般聴取者に犯人当て本格ミステリの楽しみを伝え、《EQMM》とアンソロジーは短篇ミステリの市場を作るというすばらしい成果を上げたのです。まあ、あまりにも手を広げすぎて、名義貸しまでやっているのは、誉められたものではありませんが……。

そんなクイーンが大きく作風を変えたのが、一九四二年の『災厄の町』。架空の地方都市ライツヴィルを舞台にして、アメリカの一断面を描いたこの作品は、本格ミステリと文学を両立させ、高い評価を得ました。

そして、『九尾の猫』でこの作風の頂点を極めたあと、クイーンは新たなステージに突入しました。そのステージでは——詳細は作品ガイドで取り上げますが——二つの試みがな

されています。一つ目は「本格ミステリの限界への挑戦」、もう一つは「社会との接続」。この試みは、リーが一九七一年に永眠し、クイーン創作活動が終わるまで続けました。

果てしなき影響——エラリー・クイーンは生きている

一九八二年にダネイが永眠すると、クイーンの活動はすべて終わりました。しかし、日本では平成以降にクイーンは復活したのです。海外とは異なり、日本ではクイーンの〈国名シリーズ〉と〈悲劇四部作〉は常に新刊書店で手に入る時期が続いていました。この時期に生まれ育ち、本格ミステリのファンになった世代、すなわち綾辻行人以降の新本格世代の作家や評論家が、クイーンのような作品を書き、クイーンについて語るようになったのです。実は、初期のクイーンのような、「フェアプレイを宣言する挑戦状付き犯人当て長篇」という作風は、本格ミステリ全体から見ると、少数派に過ぎません。しかし、新本格世代にとっては、これこそが本格ミステリだったのです。それだけではなく、この世代の翻訳者や編集者にも、クイーンの熱烈なファンは少なくありません。彼らが手を組み、訳が古くなったクイーン作品を新訳で出し直し、埋もれた作品を出し、新本格作家に解説や帯文を書いてもらうのです。今の翻訳者にとって、クイーンは「頼まれたから訳しただけ」

の作家ではなく、今の評論家や作家にとって、クイーンは「頼まれたから解説や帯文でヨイシヨするだけ」の作家ではありません（本書では、現在クイーンの新訳を進めている中村有^{なかむらゆ}希氏と越前敏弥氏^{えちぜんとしや}に、そのあたりを語ってもらっています）。

こうして生まれた数々の日本の本格ミステリや評論、それに新訳作品によって、クイーンはよみがえり、新たなファンを獲得することになりました。実際に私自身が、こういった作家や評論家や翻訳家や編集者の情熱に感銘を受けたことが何度もあります。

また、本格ミステリとは無関係の作家や編集者、それに漫画や映像やゲームといった他ジャンルの人たちにもクイーン・ファンは少なくありません。彼らが取り上げ、語り、ネタにすることによっても、クイーン・ファンは増えていくのです。実際に私自身が、NHKのクイーン特番のお手伝いをした際に、関係者の情熱に感銘を受けたことがありました。そして、その延長上に、本書があるのです。

探偵エラリー・クイーンとその仲間たち

処女作『ローマ帽子』の序文には、「この本の刊行時点では、クイーン警視は引退して息子のエラリーと共にイタリアに移住。エラリーは結婚して子供がいる」と書かれています。続く『フランス白粉』『オランダ靴』『ギリシャ棺』の三作は、『ローマ帽子』以前の事件という設定なので、整合性はとれています。しかし、好評を受けてシリーズが続いていくと、クイーン父子は本の刊行時点でもニューヨークで活躍しているという設定に変わってしまいました。イタリア移住は黒歴史になったのです。——というわけで、このキャラ紹介では、初期作の序文は無視しました。また、通常の紹介文に加え、各キャラがミステリにおいて果たしている役割にも触れています。

エラリー・クイーン

本職はミステリ作家。一八三センチの長身でハーバード大卒。首から上は知性の人で、首から

下はスポーツマン。高級スポーツカーのデューセンバークをすっ飛ばし、柔道の技で大男を投げ飛ばし、美女には「眼鏡をとったらハンサム」と言われるリア充ぶり。しかしてその実態は、生活力はゼロで、メンタルは豆腐で、デューセンバークは中古で、美女に惚れられても身を引いてしまう〈寅さん体質〉。しかも、ニューヨーク以外で事件にかかわると、父のクイーン警視の名前をふりかざして捜査に加わるという厚かましさ。そして、名探偵としては、以下のユニークな特徴を持っています。

① 論理的な推理をする——一見、長所のようにですが、同じように論理的な思考ができる犯人ならば、エラーリーを操れるということにもなります。これが、〈後期クイーン的問題〉につながっていくわけです。

② キャラが一貫していない——作者の作風の変化に合わせて、キャラも、推理機械↓チャラ男↓人間性の洞察者↓苦悩する探偵↓推理の暴走者、と変わっていきます。

③ 自分が解決した事件を自分で小説化している——ミステリではワトソンやヘイスティンズのような助手役が小説化しているという設定が基本で、探偵自身が小説化するのは珍しいです。これは本格ミステリにおいて革命的な設定なのですが、詳細はコラム1で。

リチャード・クイーン警視

エラリーの父で、ニューヨーク市警（NYPD）の警視。「小鳥のような小男」と可愛らしく描写されますが、実は鬼刑事。ある事件では、共犯者が警視の尋問を受けると聞いた犯人が、「自白するに違いない」と決めつけ、その共犯者を殺して口封じをするくらいですから。ただし、どんなに長所がいっぱいあっても、「親バカ」という短所一つで台無し。何と、『フランス白粉』のラストでは「神よ、息子を与えてくれて感謝します」なんて言ったりします。やもめ暮らしが長かったのですが、定年退職後に知り合った四十九歳のジェシイと結婚し、息子に介添人をやってもりました。

ワトソン役としては、トップクラスの頭脳の持ち主。エラリーの推理の穴を容赦なく突き、自身も鋭い推理を見せます。『オランダ靴』で披露する推理などは、真の解決にしてもおかしくありません。この警視の上をいくから、エラリーの推理が輝くわけです。

トマス・ヴェリー部長刑事

ゴリラのような肉体とゴリラ並の知能を併せ持つ身長一九六センチ、体重一〇五キロの巨漢。デビュー作では「警視の有能な右腕」でしたが、シリーズが続くにつれ武勇伝がエスカレートし、『アメリカ銃』では銃を持った男を素手で制圧する程度（いや、それでも凄いが）でしたが、『靴に棲む老婆』では「武装した凶漢五人を素手で制圧」になります。シヨルダータックルで破壊したドアは数知れず。

ヴェリーのミステリ的な役割は「名探偵の推理に驚くこと」。本来はワトソン役の仕事ですが、警視はエラリーの推理を聞いても驚かずにツツコミを入れるので、ヴェリーがただただ驚く役目を引き受けることになるのです。

ジューナ

警視が引き取ったロマ（旧訳では「ジプシー」）の孤児。クイーン家の家事を一手に引き受け、料理の腕前はプロ級。警視を尊敬し、彼のような刑事になりたいと思っていますが、エラリーと

の関係はかなり怪しいです。エラリーが若い女性を家に入れると不満げな顔をするし、エラリーはエラリーで、ジューナのあばら骨をまさぐったりしますから。

ミステリのな役割は「捜査の素人」。レギュラー陣が揃って捜査のプロなので、そこに素人ならではの意見をはさむ役割、つまり、〈オッドマン理論〉の体現者になります。ただし、そういった場面は意外と少なく、むしろ、癒やし担当かもしれません。残念ながら、『ローマ帽子』事件の時点で十九歳と明記されていたため、作者の路線変更に対応できず、家事の仕事もフアブリカント夫人にとられ、出番がなくなっていました。

ポーラ・パリス

ハリウッドの女性ゴシップ記者。群衆恐怖症で家の中にひきこもっているにもかかわらず、スクープを連発し、記事は全米の百八十紙に掲載されています。エラリーが一目惚れするほどの美貌と、ヴァン・ダイン風の〈心理的探偵法〉を実践できる頭脳の持ち主。ただし、群衆恐怖症を克服してエラリーにデレてしまっただけからは、キスをねだったり手料理を振る舞ったりと、すっかりハリウッドの現地妻です。

クイーンは、一九三六年には女性読者が多い高級雑誌に進出し、恋愛要素をプロットにからませた作品を書くようになりました。そして、一九三八年の『ハートの4』では、ついに探偵自身にも恋をさせることになり、ポーラが誕生したわけです。もともと、彼女のミステリ的な役割は、「ハリウッドの情報提供者」。映画関係者などは表と裏の差が激しいので、そのあたりをエラリーに教える人物が必要になりますから。

ニツキイ・ポーター

「作家」エラリーの秘書として雇われましたが、なぜか事件捜査にも、もれなく付いてきます（無視しようとする、「秘書の仕事をボイコットする」と脅す）。しかも、女性の事件関係者がエラリーと仲良くすると、もれなくヤキモチを焼きます。特技はメイドや看護師に扮してのコスプレ潜入捜査で、猫耳を着けたこともあります。エラリーにわかりやすい〈好き好きオーラ〉を出す一方で、わざと嫉妬をあおる行動をとったりもします。

もともとは一九三九年に放送が開始されたラジオドラマ『エラリー・クイーンの冒険』のために生み出されたキャラ。ドラマの人気を受けて、小説にも逆輸入されるようになりました。ラジ

オでは「レギュラー陣が野郎ばかりなので若い女の子も加えよう」という、現在なら炎上しそうな動機で生まれたらしいのですが、ミステリ的には「捜査の素人」という役割。ただし、ジューナとは異なり、警察関係者が「硝煙反応」等の（ラジオの聴取者にはなじみのない）専門用語だけを使うのを抑制する役割が大きいです。また、クイーン父子には欠けている「女性の見地」からのアドバイザーも務めています。

その他の人々

クイーンの初期長篇は警察小説としても楽しめます。警視の部下、すなわちNYPDの刑事たち（ヘス、ピゴット、フリント、ジョンソン、ヘイグストローム、リッター、指紋係のジミーなど。戦後の作には黒人刑事も登場）はきちんと描き分けがされていて、出番も少なくありません。ただし、ミステリ上の役割は、「捜査結果の担保」。彼らは優秀なので、その捜査結果は信頼できる（ので、推理に用いてかまわない）わけです。例えば、ある長篇ではリッターが家宅搜索の際に重要な手がかりを見落としたと非難されますが、解決篇では、犯人が搜索のあとに手がかりを置いたことが判明します。

検死官補のサミュエル・プラウティは、「口の悪い偏屈爺さんだが腕は立つ」というドラマではおなじみのキャラで、クイーン父子とのかけあいは楽しめます。ですが、これまた役割は、「鑑識結果の担保」。プラウティが「殺害時刻は夜の一時から三時の間」と言ったら、読者は無条件でそれを推理に用いてかまいません。

地方検事のヘンリ・サンブソンは特筆すべき属性は与えられていませんが、「エラリーの推理の検証役」として重要な役を担になっています。エラリーの推理は物的証拠がないという欠点を持つので、「起訴に持ち込めるか」を警視がチェックし、「有罪に持ち込めるか」を地方検事がチェックするわけです。

J・J・マックはエラリーの友人で、探偵エラリーが書いた（という設定の）『ローマ帽子』の出版に尽力した人物。刊行の際に〈読者への挑戦〉を入れたのも彼です。そして、ミステリ上の役割は、「メタレベルでの保証」。「探偵が自分が解決した事件を自分で小説化した」という設定は、読者に「エラリーは自分に都合の良い嘘を書いているのではないか？」という疑いを招いてしまいます。そこで、クイーン父子と親しく、事件のことも知っているマックが序文を書き、その疑いを晴らすというわけです。

探偵ドルリー・レーンとその仲間たち

シリーズ第一作『Xの悲劇』と第二作『Yの悲劇』は同時期の事件ですが、『Zの悲劇』と『レーン最後の事件』はその十年後という設定。従って、作中人物の肩書きなどが大きく変わっています。また、『Y』は一九七八年に日本でTVドラマ化されているので、その配役も添えておきましょう。

ドルリー・レーン

かつてはシェイクスピア俳優として一世を風靡しましたが、聴力を失い引退。卓越した推理力を持ち、変装の名人でもあります。老人ですが肉体は若々しく、読唇術に長けていたため会話にも不自由しません。ドラマでは「若くして引退」と設定を変え、石坂浩二が演じました。以前、演出の杉田成道氏にうかがったところによると、当時、金田一耕助を演じていた石坂浩二が、「日本物ではなく洋物を、イメージチェンジした役をやりたい」と言ったのが企画のきっかけだったそ

うです。

本格ミステリ史上、最も深い闇を持つ名探偵。引退後のレーンは、「これまでわたしは（俳優として）人形遣いの糸に操られてきましたが、いまはおのれの手でその糸を操りたい衝動を覚えてします。作り物のドラマではなく、より偉大な創造主の手になる実社会のドラマのなかで」と語り、自らが「人間ドラマの極致」と呼ぶ殺人事件に、探偵として挑みます。レーンは謎を解きたいのではなくありません。殺人というドラマの出演者を操りたいのです。

探偵だけが真相を見抜いた場合、圧倒的な力を手に入れたことになります。容疑者や被害者候補のみならず、犯人の命運まで握ることができるからです。新たな殺人を阻止するかどうか、犯人を逮捕させるかどうか、探偵の胸三寸になるわけです。レーンはその卓越した推理力によっていち早く真相を突きとめ、事件に介入し、事件の形を変え、自ら事件を起こします。この「ダークサイドに立つ名探偵」の姿は実に魅力的ではありませんか。ファンを公言している麻耶雄嵩あゆたかが、自らもメルカトル鮎あゆという「事件の形を変える」名探偵、いや、銘探偵を生み出したのも、当然だと言えるでしょう。

ブルーノ

『X』では地方検事でしたが、『Z』ではニューヨーク州知事に出世。探偵エラリーものではクイーン警視とサン普森地方検事を合わせたようなポジション。早い段階からレーンの推理力を評価し、事件を持ち込みます。ただし、以前から知事を狙っていて、その実績作りのためにレーンを利用した節もないわけではないようです。『Y』でレーンの闇の部分に気づき、縁を切ります。ドラマで演じたのは岩下浩^{いわしたひろし}。

サム

『X』では警視でしたが、『Z』では引退して私立探偵に。探偵エラリーものではクイーン警視とヴェリー部長を合わせたポジション。たたき上げなので、最初は素人のレーンを嫌っていました。『X』の最後ではすっかり心服してしまいます。ブルーノとは異なり、『Y』でもレーンの闇に気づくことはありませんでした。ドラマで演じたのは金子信雄^{かねこ のぶお}。

ページエンス・サム

『Z』から登場。レーンに劣るとも勝らない推理力の持ち主ですが、謙虚さに欠けるため、ファンには「女エラリー」と言われています。サムの娘なので、レーンの闇の部分は知らされず、恋愛感情を抱いてしまうことに。『Y』の原作には出ていませんが、ドラマには登場し、夏目雅子^{なつめまさこ}が演じました。また、笠井^{かさい}潔^{きよし}の〈矢吹^{やぶき}駆^{かけ}シリーズ〉の語り手、ナディア・モガールのルーツでもあります。

第 2 部

全作品 ガイド

*The Case-Book
of Ellery Queen
and Drury Lane*

名探偵エラリー・クイーンと
ドルリー・レーンの事件簿

《読者への註》

- ・ガイド文は『アメリカ銃の秘密』と『顔』のみ《ミニコラム》にネタバラシがあります。
- ・それ以外にもヒントめいた文があるので、一切の予備知識なしでクイーン作品に出会いたい人は、本篇読了後にガイドに進んでください。それでも楽しめると思います。
- ・クイーン作品以外でガイド文に頻出する本は以下の通り。
『推理の芸術』——F・M・ネヴィンズ『エラリー・クイーン 推理の芸術』
書簡集——ジョゼフ・グッドリッチ編『エラリー・クイーン 創作の秘密』
- ・邦訳書が複数ある場合は新訳を優先し、新訳が複数ある場合は、角川一創元の順としました。

第 1 章

華麗なる 推理の天才の 活躍

（国名シリーズ当時の）私たちは、
巧妙で複雑なプロットや独創的な
アイデアを期待されていました。
すべてがとことん緻密で徹底して
論理的であることも。手がかりに
関しては、私たちは読者に対して
完璧にフェアにふるまわなければ
なりません。そして、読者
が呆然とするくらい意外性に満ち
た結末も求められていました。

——TV『ディック・キャベット・ショー』一九
七八年五月二十三日放映でのF・ダネイの発言より。

謎解きは挑戦状のあとで

1929年 ストークス社

ローマ帽子の秘密

ローマ劇場で上演中、観客席で悪徳弁護士が毒殺された。劇場はただちに封鎖され、クイン警視とその部下によって捜査が始まる。だが、超満員の観客、舞台関係者、劇場関係者の誰もが容疑者であり、誰もが犯行の機会を持っていた。しかも、被害者は恐喝者で、容疑者の誰もがゆすられていた可能性があるため、動機から犯人を絞り込むこともできない。

この事件に挑んだ名探偵エラリー・クイ

ーンが着目したのは、被害者の帽子が消えているという点。劇場内で見つからず、処分された痕跡もないので、犯人が持ち出したとしか考えられない。だが、劇場内にいたすべての人々は、退出の際に警察のチェックを受けているのだ。どうやって警察の目を欺いたのだろうか？ だがエラリーは、このたった一つの「存在しない」手がかりから推理を組み立て、たった一人の犯人を指摘するのだった。



書影は訳||越前敏弥+青木創、
角川文庫(2012年刊)。

GUIDE

クイーンの本格ミステリとは？

「本格ミステリとは、親しい間柄の少人数が館のような閉ざされた空間で次々と殺されていく話」と思っている読者は、本作を読んで、期待を裏切られることになります。この作では、互いに無関係な人々が多数集まる劇場で、一つしか殺人が起きません。

「本格ミステリでは、解決篇で意外な真相が明らかになる」と思っている読者は、本作を読んで、期待を裏切られることになります。本作では、劇場の中にいた人物が殺人者であることはわかっているので、誰が犯人でも意外性はありません。また、奇抜な毒殺トリックが使われて

いるわけでもありません。

「本格ミステリでは、解決篇で伏線の回収が行われる」と思っている読者は、本作を読んで、期待を裏切られることになります。本作の解決篇で披露されるのは、伏線の回収、つまり、「ある場面に、あるセリフに別の意味があったことの説明」ではありません。披露されるのは、手がかりによる推理、つまり、「手がかりから犯人の条件を導き出し、それを満たす人物を一人に絞り込む」ことなのです。そして、読者も知っている手がかりを元に、読者が気づかない条件を導き出し、それを用いて殺人者を特定したならば、犯人が意外ではなくても、読者は意外性を感じるに違いありません。そう、本作で意外なのは、〈真相〉ではなく〈推理〉なのです。そして、この〈意外な推理〉を、容疑者が数名程

度に限定される館などではなく、数百人もの容疑者であふれかえる劇場を舞台に描いたことが、本作のユニークな魅力に他なりません。

挑戦を受けてみませんか？

みなさんがこれから本作を読もうとするならば、犯人を推理するような読み方が、一番楽しめることになります。ぜひ、挑戦状で読むのを止めて、犯人を推理してみてください。「劇場から帽子を持ち出した方法」については問題篇でエラリーが示唆しているので、みなさんは「その方法が実行可能な人物」を推理するだけで、犯人にたどり着くことができます。ここで推理をしてから解決篇に進めば、たとえ外れたとしても、どこまでエラリーに近づいたかを突き合

わせて楽しむことができるでしょう。——と言っても、私はまったくわかりませんでした。

活躍する名探偵——のパパ

「本格ミステリでは、名探偵がさっそうと登場して、無能な警察を尻目に自ら捜査を行う」と思っている読者は、本作を読んで、期待を裏切られることになります。本作ではエラリーは捜査にはノータッチで、指揮をとるのは父親のクイン警視。次作以降にも登場するヴェリー部長や刑事のヘス、ピゴット、フリンント、ジョンソン、ヘイグストローム、リッター、それにブラウティ検死官補の仕事ぶりもじっくり描かれています。どう見ても、挑戦状の前までは、〈名探偵もの〉ではなく〈警察小説〉だと言えるで

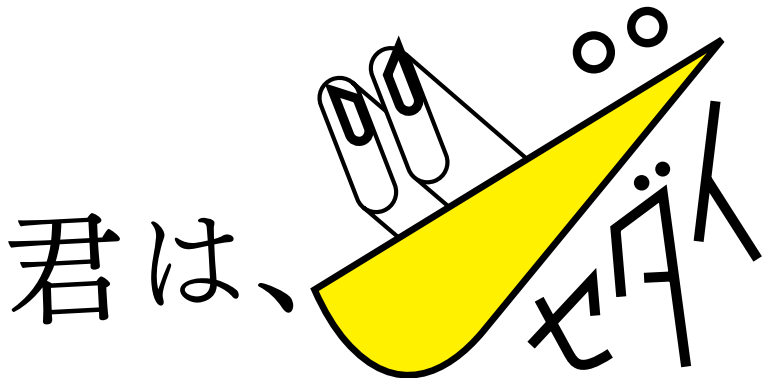
しよう。実際、登場人物表には「そのような謎を解く任にあたる聡明な紳士ふたりは——リチャード・クイーン氏 エラリー・クイーン氏」と書かれています。つまり、エラリーの助手が警視なのではなく、警視のアドバイザーがエラリーなのです——少なくとも第一作では。次の作品からはエラリーが前面に出るようになりますが、本作では、警視の活躍、つまり「パパ活」ぶりを、たっぷり楽しむことができます。なんと、推理を語るのも、エラリーではなく警視なのですよ。

古書を求めて帽子を得る

そのエラリーが事件捜査に加わったのは、高価な古書を買うためでした。父に金を借りよう

として電話をかけたのが運の尽き。いやあ、とても大学を卒業して何年もたっている大人とは思えませんね。推理力で父の手助けをしていなかったら、単なる親のスネかじりの古本オタクでしょう。大学を卒業しても父親と同居しているし、炊事洗濯はジューナに任せているし……。

ただし、その唯一の取り得である推理はユニークかつ見事なものです。私の知る限り、似たタイプのハイレベルな推理は、ありすがわ有栖川有栖の『女王国の城』くらいしか思い浮かびません（こちらは「持ち出す」のではなく、「○○○○」のですが）。よく出来た数学パズルには、補助線を一本引くだけで簡単に解けるものがありますが、この二作もそんな感じですよ。そして、その補助線が何かは、みなさんが確認してください。



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!